



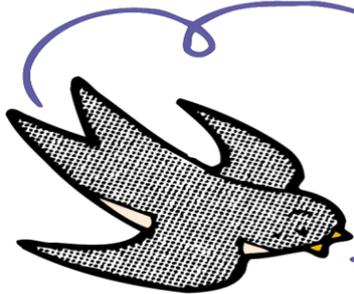
本が好き！本が好き！本が好き！



さいたま市立原山中学校図書館だより

2023.4 司書 小林

去年は、花吹雪で歓迎していただき桜が、今年は美しい若葉で新入生をお迎えしました。1年生の皆さん、入学おめでとうございます。2・3年生の皆さん進級おめでとうございます。17日には、前期図書委員会が発足。原山中学校図書館が本格的にスタートしました。読書に学習に、図書館をどんどん利用して充実した中学校生活を送ってください。4/24(月)から、ゴールデンウィーク10冊貸出を実施します。どんどん借りていってくださいね。



ゴールデンウィーク 10冊貸出

～まとめて本が読めるのは 今だ！～

貸出期間 : 4/24(月)～4/28(金)

返却日 : 5/9(火)



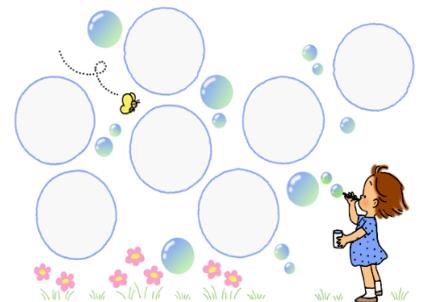
10,000ページに挑戦！

＜図書委員会主催の読書マラソン＞

原山中図書館の本を読んで、記録用紙を記入していきます。10,000ページを読破すると、校長先生から表彰されます。

- *原山中学校の図書館の本
- *マンガ・絵本は対象外です。

記録用紙が足りなくなったら、図書館に取りに来てください。



＜原山中図書館のきまり＞

*開館時間と曜日

月・火・木・金 10時00分～16時45分

*貸出冊数と期間

原則 3冊1週間 **期間厳守**

読み終わらないときは、必ず延長に来てください。

*予約とリクエスト

予約・・・借りたい本が貸出中の時は予約ができます。

リクエスト・・・原山中図書館に入れて欲しい本があったら、申し込んでください。

(内容を検討の上、購入します。)

*図書館が閉まっている時は、入口横の返却BOXへ入れください。

* 図書館からのお願い *

本を返す時は、なるべく元の場所に返すようにしましょう。

図書館の分類についてくわしくなり、必要な本が探しやすくなります。



子ども読書の日について

3-1 図書委員 榮 理静



『こども読書の日』と関連する『こどもの読書週間』が、1959年に日本書籍出版協会児童書部会らによって開催されました。期間は、4月27日～5月10日とし、しおりを配布して宣伝したとされています。

翌1960年、今度は読書推進運動協議会の発足にあわせて主催団体となり、『こどもの読書週間』と改名、こどもの日を含んだ5月1日～14日と期間を変更しました。

時は流れ、2000年、『子ども読書年』を機に、『こどもの読書週間』の期間が4月23日～5月12日と変更、延長されました。『国際子どもの本の日』（4月2日）をはじめとする多くの本の記念日や関連イベントがあったことが要因であるようです。また当時、『子ども読書活動推進法』の施行により、4月23日が『こども読書の日』となりました。それらがゆえに、当時から現在に至るまで、読書の推進活動は、年々大きな盛り上がりを見せています。

さて、原山中学校ではこれら読書の推進活動に合わせて、毎年4月下旬に『ゴールデンウィーク10冊貸出』を実施しています。これを機に様々なジャンルや作家に触れてみてはいかがでしょうか。定期的に図書委員や教職員おすすめの本が紹介されますので、参考にして頂きたいです。また今年度も例年同様10000ページ読書マラソンが実施されます。皆さんの達成の報告を心よりお待ちしております。

今年度の課題図書 <課題図書は5月に原山中図書館に入ってきます>

『スクラッチ』 歌代 朔/著 あかね書房



コロナ禍で「総体」が中止になったバレー部キャプテンの鈴音。美術部部長の千暁は出展する予定の「市郡展」も審査が中止。「平常心」と自分に言い聞かせ「カラフルな運動部の群像」の出展作を描き続ける千暁のキャンバスに、鈴音が不注意から墨を飛ばしてしまい…。

コロナ禍で黒く塗りつぶされた中三の夏。そのなかでもがきながら自分たちらしい生き方を掴み取っていく中学生たちの、疾走する”爪痕”を描く物語。

『アップステージ : シャイなわたしが舞台に立つまで』

ダイアナ・ハーモン・アシャー/著 武富 博子/訳 評論社



シーラは目立つことが大好きな女の子。学校で「ザ・ミュージック・マン」のミュージカルに取り組みることになり、みんなその話題でもちきりだ。実はシーラは歌がうまい。先生や親友に強くすすめられてオーディションを受け、カルテットのひとりに選ばれる。練習を重ねるうち、シーラはこのミュージカルを心から愛するようになる。さまざまなトラブルや淡い恋の芽生えのなか、とうとう幕を開ける日がやってきて……というユーモアいっぱいの物語。原題の「アップステージ」とは、舞台上で主役がかすむようなことをする、という意味がある。

『人がつくった川・荒川 : 水害からいのちを守り、暮らしを豊かにする』

長谷川 敦/著 旬報社



首都圏をつらぬき、流域に約1000万人が住む荒川は、人の手でつくられた川であることを知っていますか。かつて、荒ぶる川=荒川の流れを変えることで江戸の繁栄はうみだされ、たび重なる洪水から人々を守ってきました。川の歴史と流域の暮らしの変化をていねいに追いかけてながら、地球温暖化が原因とされる近年の大規模な水害をどう防ぐかまで、荒川の過去・現在・未来を旅します。